

アニマル・セラピー

——動物に癒されること——

中 村 茂 裕

Animal Assisted Therapy or Activity

NAKAMURA Shigehiro

Abstract

To be healed by animals

This is a translation of an article (Title: Gesundheit der zweifelthafte Wert teurer Tiertherapien) in the column *Deutschland* in the German weekly magazine *Der Spiegel* Nr.16, published on April 18, 2011.

Almost at the same time, on March 11, 2011, the terrible Higashi-Nihon Earthquake, and the nuclear power plant accident at Fukushima occurred. Daily life has suddenly changed, and even now the situation is not improving.

I was deeply shocked when I saw animals, which had previously been cared for by people, walking around and waiting for their masters. Dogs, cats and cows were wandering on the road. I have been thinking over and over about what it means, to be healed by animals.

2011年3月11日、東日本を襲った大震災と福島第一原発の重大事故が、我々に与えた「傷」は、計り知れない。あの日あの時を境として、それ以降、我々は何らかの「変化」を感じて、異なった生活を送ってゆかねばならなくなった。たとえば、それは節電であったり、大気中の放射能への懸念であったりして。

平成25年2月26日 原稿受理
大阪産業大学 教養部

そんな中、ドイツの総合学術雑誌シュピーゲルに、動物による「癒し」の記事を見つけた。自然の災害であれば、ある程度の時間の経過とともに復興の明かりが点るであろう。しかし、原発の事故である。普通であれば、再建の動き、芽生えが見えるはずのあちらこちらの町々で、打ち捨てられて、それでもなお、飼い主が戻るのを待つ犬や猫や牛たちが、取材映像に映し出されるたびに、今回の震災の恐ろしさを感じる。

「動物に癒される」ということと、「動物とともに暮らす」ということ、身近な動物たちとの関係が、今後どのような形で続いていくのか、考えさせられた。

翻訳

デア シュピーゲル 2011年4月18日 第16号

健康

老人ホームのアルパカたち

犬、ラマ あるいはイルカによるセラピー治療がますます多くの顧客を得ている。しかしながら医療関係者はその療法の長期有効性に疑念を呈する。

数日前、「アルパカセラピー」ハンブルク協会のマティアス・ファインデルト会長は、三たび、外部への出動を行った。ある老人ホームが依頼してきたのだ、往診は可能かと。アルパカとの出会いはたいいていの痴呆症居住者にきっと効果があるにちがいないと福祉ホームの担当者たちは信じていた。しかし残念ながらマティアスは動物たちと四階まで上がってこなければならない、なぜなら老人たちは、もはや外に出ることができないからだ。「問題ありません」とファインデルトは言った。

彼は二頭のおとなしいオスのアルパカ、コンドルとバンディットをトレーラーに積み込んで、彼らと一緒に街を廻りながら横切り、老人ホームの中で、彼らをエレベーターに押し込み、四階へと運んだ。四階ではエレベーターの扉の前で老人たちがすでに待ち構えていた。アルパカはポリビアやペルーのやせた山岳地帯に生息していて、ラマに似た動物である。ハンブルク老人ホームでは、コンドルとバンディットはセラピー治療のために椅子でつくった輪の周りを二三回まわり、そのあと老人たちは、アルパカのまるでフロカティのように分厚い毛皮をもじゃもじゃと触ることが許される。

このようなシーンは、いつの間にかドイツの養護施設でたびたび見られるようになった。

人懐っこい犬は、分不相応にも Wachkoma（重度頭蓋 - 脳 - 外傷性障害）患者のベッドへぴょんと飛び上がる。ミニブタは一時間あたり 150 ユーロのために障害者施設の廊下を走り、ウサギとモルモットは刺激リズムのために高齢者医療部局の机の上をぴょんぴょんはねていく。これらすべてはたいてい、「動物支援セラピー」と呼ばれて、しばしば大いなる治療効果を約束して、人々の気持ちをひきつけるのである。

落ち着きのない子供たちは、犬と一緒にいると、それまでよりも落ち着く。それは要するに、犯罪により精神的に深いショックを受けた犠牲者たちは信頼を覚え、がん患者は馬やラマの表情に新たな希望を得るということであろう。イルカセラピーの提供者は準備万端、リハビリテーションプロセスにおける「決定的な転換点」への見込みをもって人々を誘う。海洋性哺乳動物に近づくために、障害の重い子供たちは、まったく突然に、それまで慣れ親しんだことのない運動の流れの只中に置かれるのである。

そして、病気を患っていたり障害を持つ人の家族は、なんとか最後の希望にしがみつこうとすることが多いので、申し出は常に増大する。そうこうするうちに、何千ものリハビリの申し出を受ける資格があると感じている動物所有者は、儲かるマーケットへ殺到し、一部はセラピーの基礎知識さえも一切持たずに、非常に高い報酬を受け取っているのである。

かつて幼稚園へ無給で出向いていた犬の所有者が、精神的な病気に対する予防と称して今や一時間につき優に 300 ユーロの料金を取るのである。

もちろん、動物との交流は少しは喜びを引き起こすこともある、と動物支援セラピーのエキスパートであるビュルツブルクの女性心理学者エヴァ・シュトゥンプは言う。しかしながら申し出は大部分、「長期にわたる効果」を期待するものではない。そのために、それらの申し出は、健康保険で排除されることもないのである。

学者や健康保険の懐疑が、これまでのところしかしながら、このブームに損害を与えたことは一切ない。特にイルカセラピーは、大規模な PR キャンペーンのおかげで未だになお猛烈な流行を見せている。イルカセラピーはそれでもやはり高価なものであるので、ディスプレイ・バリエーションも市場に出回っている。この場合、フリッパーの代理として比較的安価な犬が使われるのである。「犬とのウォーターセラピー」の場合、客は 45 分 45 ユーロでニューファンドランド犬と一緒に水遊びが許される。

アルパカロビーストのファインデルトと彼の同僚幹部であるブリギット・フィエットも、自分たちの動物をイルカとは対極のポジションに位置づけている。彼らのセラピーは自閉症や精神的トラウマのある子供たちにとっては「少なくともまったく同程度に効果

的」であるが、しかしわずか10分の1のコストしかかからないのである。現在、10時間コースは、訓練を受けた作業士か、または別のセラピストが常時付き添って、すべて込みで1600ユーロになるとのこと。両親がそれほど支払えない場合には、たいてい寄付金（義援金）基金が在る。そうすると彼らの子供はアルパカたちと、例えば木の幹やシーソーのあるセラピー専用馬場コースを走ることができるのである。

イルカセラピーは、もちろん高価格にもかかわらず、カリブやフロリダの海岸ではブームになっている。海洋哺乳動物には犬や馬やラクダとはちがって、まさしく魔術的な能力があると言われている。フリッパーの種族たちは、子供をソナーを使って探り、診断することができるし、遺伝的、精神的な欠陥を認識し、その後、それらの欠陥を彼らのカチカチという鳴き声で治すことができると、ハワイのシリウス研究所は主張している。

ドイツにおける最も有名なりハビリ旅行主催者は、デュッセルドルフの「ドルフィンエイド」協会である。創始者のクリステン・クーネルトは、過去繰り返し「不思議」の存在を物語っている。それらの不思議はイルカと一緒にいるときに起こっているというのである。「セラピーは『上からの暗示』に似ているんです。」この暗示がこれまでに、彼ら自身の申告によると、30万ユーロの寄付を協会にもたらしている。さらに障害や病気の子供を持つ数千にも及ぶ親からの問い合わせも。すでに、およそ3000件のセラピー補助金が認められた、と協会は報告している。「待機リストにはしかし、依然として数千人の少年少女が残っています。」

忍耐の訓練など、多くの親は受けたくはないものである。自分たちの子供に何かいいことをしてあげる、という希望の中に彼らは自己投資をするのである。セラピーの中心地、カリブ海の島クラサオへの旅は、子供連れの親にとって、およそ12000ユーロの出費となる。この旅の顧客の根幹は、しばらく前からすでに、しばしば議論されてきた集中困難・活動過多障害すなわちADHSの少年少女によってますます多くを占められるようになってきている。この点に関しては、プログラムディレクターとして拠点経営スタッフの一人であるクーネルトも報酬を受け取っている。ヴェストファーレン生まれのこの女性は、次に、彼女の居住地マイアミから広くUSA全土への組織拡大を企図しているのである。

医師たちは懐疑的である。かくして神経小児科学と社会小児科学および青少年科学それぞれの学会は二～三の研究評価に従って、次のような結論に至った。すなわち、いずれにせよ、馬および乗馬セラピーには馬上での動きも織り込み済みなので、「実質的に存在するような肉体的疾患に対する基本的な効果は是認されうるものである。」他のあらゆるセラピーの場合、イルカとのセラピーの場合においても短期限定の効果しか認められない。そこで医師は次のように提案している、代わりに「ペットの購入や飼育用動物との囲い地

の中での規則的な接触」について熟考してみるようにと。

奇妙なことに、よりもよってアメリカ合衆国イルカセラピー創始者、デービッド・ナターソンその人が、動物治療の能力に対して疑念を膨らませているのだ。大きな需要を操作することができるように、この心理学者は最近、一頭の人工イルカを開発させて、重度障害の子供たちと遊泳させている。結果：このロボットイルカは本物のイルカよりもすぐれたセラピー効果をあげた。

ガイド・クラインフーベルト